



井上氏城跡

—居館址南堀範囲確認調査—

1980年3月

須坂市教育委員会

井上氏城跡

—居館址南堀範囲確認調査—

1980年3月

須坂市教育委員会

例　　言

1. 本書は長野県史跡「井上氏城跡」居館址に隣接する市道土栗・金口線改良工事に先立ち、発掘調査を実施した南堀跡の範囲確認調査報告書である。
2. 本遺跡は長野県須坂市大字井上字小坂に存在する。
3. 本調査は須坂市（農業土木課）の委託を受けた須坂市教育委員会が主体となり、金井正三が発掘担当者となって行った。
4. 本調査の参加者は以下のとおりである。

〔調査団長〕徳永哲夫（須坂市文化財審議委員）

〔調査主任〕金井正三（須坂市教育委員会社会教育課主事）

〔調査補助員〕横山康永、藤沢正人、山本孝司、坪井扶司夫、川辺伸二、湯本均、宮崎英一

〔事務局〕須坂市教育委員会社会教育課

竹前福治（課長）、山岸利文（課長補佐）、丸山富士代（主事）。

5. 遺物の整理・実測は横山、藤沢の協力を得て金井が行った。写真の撮影及び本書の執筆は金井が行い、徳永団長の校閲を受けた。
6. 実測図の縮尺は各図に記したとおりである。写真図版の縮尺は遺物が寸であるが、他は不統一である。
7. 出土遺物、実測図等は須坂市立博物館に保管してある。
8. 本調査のために指導、助言、協力を賜わった下記の方々に謹んで謝意を表する。

金井喜久一郎（長野県文化財保護審議会委員）

白田武正（長野県教育委員会事務局文化課指導主事）

山岸仁之助（井上町区長）

敬称略

目 次

例 言

目 次

1. 調査に至る経過	1
2. 環 境	1
3. 日 誌	3
4. 調 査	4
5. 遺 物	7
6. ま と め	9

挿 図 目 次

第1図 井上氏城跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)	1
第2図 居館址全体図	3
第3図 調査区域詳細図	5
第4図 各調査地点の堆積土層図 (東壁)	6
第5図 各調査地点出土土器	8
第6図 各調査地点出土の石臼	9

写 真 目 次

写真一 遺 跡

1. 遺跡遠景 2. 調査前の状態

写真二 遺構と遺物出土状態

1. 原形を残す西側堀跡 2. 同南側堀跡 3. 支脚出土状態 4. 石臼出土状態

写真三 各調査地点堆積土層

1. 第1地点 2. 第2地点 3. 第3地点 4. 第4地点

写真四 出土遺物

1. 第1地点 2. 第2地点 3. 第3地点 4. 第4地点 5. 石臼

写真五 観音仏と古絵図

1. 居館址出土の観音仏 2. 井上村小字絵図 3. 居館址の場所を示す井上村絵図

1. 調査に至る経過

須坂市は農業の機械化にともない、農道網の整備を行っているが、昭和54年度から井上地区の土堀・金口線農道改良工事に着手した。そして、昭和55年度は小坂地区的工事を実施することになった。

ところが、この昭和55年度実施区間は長野県史跡「井上氏城跡」（居館址）に隣接していたため、県教育委員会の指導をあおいだ。このため昭和54年7月、県教育委員会文化課より白田指導主事が指導に参り、現地において工事担当の須坂市農業土木課と協議した。現地は居館址の面影をもつともよく残している南側部分であり、巾約7mの堀をへだてて農道が隣接している。県史跡指定区域はこの堀と道路の境までであり、道路の拡幅は反対側（南側）であったが、現道路部分、あるいは拡幅部分に堀跡の南縁が埋もれている可能性があるため、事前に調査を実施することになったのである。

調査は須坂市（農業土木課）の委託を受けた須坂市教育委員会（社会教育課）が調査団を編成して行うことになった。そして農道であることから農作物の収穫が済んだ11月以降に調査を実施する予定であったが、補助員等の問題から翌55年3月に実施することになったのである。

2. 環 境（第1・2図）

日本一の長河千曲川は、県内第2の大きな盆地・善光寺平で犀川を合流し、善光寺平北部では平坦のため川幅を広げて北流している。しかし、中野市立ヶ花付近からは山また山の間を蛇行して新潟県に向かっている。

善光寺平の東部分を占める須坂市は河東と称している地域の中心地に当り、千曲川によって形成された低地帯と、千曲川に流れ込む4つの河川によって形成された大きな複合扇状地によって構成されている。東は上信国境をなす急峻な山地によって画されている。低地帯は標高335m前後であり、後背湿地は穀倉地帯として、自然堤防は集落地として毎年秋の水害にもめげず利用されている。もちろん近年は堤防が築かれたためほとんど水害はないが。複合扇状地はきわめて大規模なもので、傾斜角度は3~8度、扇端部から扇頂部まで11~12kmもあり、また標高差は50mもある。扇央部は乏水地帯であるため開発が遅れ、日滝原・高井野等と呼ばれる長い間不毛の地であったが、近年は灌漑技術が進んだため大果樹園地帯となって、リンゴ・ブドウが作られている。上信国境に連なる山々は構造線や火山帶の入りくんだ地域にあるため急峻であり、川は各地で寸断され滝となり、また各地に温泉を湧出している。

須坂市における最初の人間生活の痕跡は石小屋洞穴と呼ばれている仁礼地区的洞穴で、そこから約1万年前の土器が出土している。しかしその後繩文時代約8,000年を通じて、小さな遺跡は散在しているが、大規模な集落は発見されていないことから、地形的に生活しにくい場所であったと



1. 井上氏居館址(県史跡) 2. 井上氏大城(同) 3. 井上氏墳墓(市史跡)
4. 竹ノ城(同) 5. 福島城推定地 6. 高梨氏居館址推定地
7. 須坂城(市史跡) 8. 須坂藩御館

第1図 井上氏城跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)

考えられる。ところが稲作が始まった約2,000年前、弥生時代に入ると遺跡数は増加し、千曲川によって形成された低湿地を目の前にした湧水地帯一扇端部一に集中してきた。さらに古墳時代に入ると新田、小河原、塙川、幸高、井上を結ぶ扇端部は集落ベルト地帯となり、有力者の古墳は駄川沿岸や坂田山麓や日向原に大量に築造された。

その後奈良・平安時代を通して牧場経営も行い(高位牧)、大集落はさらに発展し各地区に土着の豪族が現われてきた。それは小河原の通称左願寺、小山八幡の長者屋敷等から出土している古瓦(寺院またはこれに近い施設があった証拠)から知ることができるのである。

平安時代も終りになると土着の豪族は武士団を編成し、互いに権力抗争を繰り返しながら大きな豪族にまとまっていくのである。このような豪族の中で、この地方唯一の井上氏はその出自を源頼信の子頼季と称し、保科、小河原氏を配下として勢力を拡大した。さらに村山、高梨、須田

・米持・榆井氏を一族にもち、治承4年（1180）には源氏の旗揚げにも参加したのである。このようなことから現在、居館址を中心の山城（城ノ峰または大城）が長野県史跡に指定されており、また墳墓と称する地と、竹ノ城（枝山城）が須坂市史跡に指定されているのである。

3. 日誌

調査は長野県史跡指定区域に隣接する工事部分に20mおきに4m四方の調査地点を設定し、東から第1地点、第2地点、第3地点、第4地点と命名した。調査の最大の目的は堀の範囲確認であることから、各地点とも東壁を中心に調査を進めることにした。

3月17日（月）晴れ

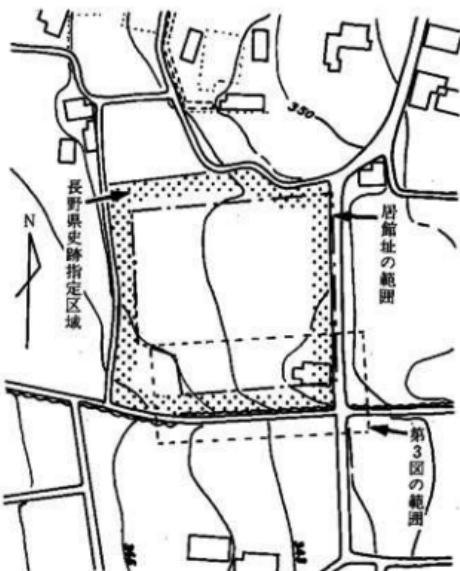
午前9時現地集合。團長の徳永哲夫先生から発掘の注意等あいさつを受ける。続いて長野県文化財保護審議会委員金井喜久一郎先生から井上氏とその遺跡について話を聞く。そして先週設定した調査地点第1、第2から手をつける。いずれも石ばかりであった。

第1地点はほとんど石ばかりが堆積していたが、その中から土師質土器、須恵器大甕の破片数点が発見された。約70cm掘り下げるも状態は同じで、遺構が検出される気配はなかった。

第2地点も石に混じって土師質土器、須恵器の破片が出土。地表下40cmぐらいから少なくなつた。非常に暖かい一日であった。

3月18日（火）くもり時々晴れ
昨日に引き続き第2地点を掘り下げる。土師質土器、須恵器の破片が比較的多く出土したがまとまりがない。また道路側は非常に大きな石が多いが、煙側が少ないことから洪水によるものとは思われなかつた。午後になって、煙側の石の少ない部分は堀の南縁で、石の多い部分は埋めたてた部分ではないかと推察された。

また第1地点は昨日70cm掘り下げたものの乱堆積が依然として続いているため中止し、第3地点に手をつけた。表面はかたく石が多い



第2図 居館址全体図 (1:2500)

い。

3月19日（水）快晴

第2地点東壁を清掃したところ、昨日推察のとおり堀の縁と埋めたてた石であることがはっきりした。

第3地点の調査を続行する。南側に大きな石積みを検出した。人為的に積まれた石積みと思われた。北側は埋めたてた乱石が深く、乱石と人為的な石積みの境はやはり斜めになっていてあきらかに堀の縁であると思われた。

第2地点清掃後、第4地点に手をつける。北側は石混じりの表土はわずかで、その下はやわらかい泥土となつた。また南側に埋めたてたと思われる礫層を確認した。

第1から第3地点の実測、写真撮影を行つた。

3月21日（金）くもりのち晴れ

第4地点を清掃する。北側の泥土は堀内の腐植土と思われた。写真撮影・実測を行ない終了とする。

3月22日（土）雪

昨日までの暖かさがうそのような日で、朝から雪が降り続き結局夕方まで降っていた。博物館にて器材を洗い整理し、遺物の水洗いを行つた。

3月24日（月）晴れ

小型ブルトーバーを依頼し、埋めもどしを行つた。

4. 調　　査（第3・4図）

第1地点

約70cm掘り下がたが石ばかりで自然堆積層を確認することができなかつた。しかしこの中から土師質土器、須恵質土器が少なからず出土した。

第2地点

約110cm掘り下げる。南側畠部分においては耕作土が約30cmあり、その下に埋めたてられた礫層が約40cmある。そしてこの下に堀南側の縁がある。この縁は石をほとんど含まない土だけの層が約30cmあり、その下は自然堆積の砂礫層がある。埋めたてられた礫層は2mの幅をもち、堀に向つて流れ込んでいるようである。この礫層はかなり大きい石（直径20cm）が多く、きわめて乱雑に投げこまれたようである。南側は礫層の上に礫をあまり含まない層が乗つてゐる。

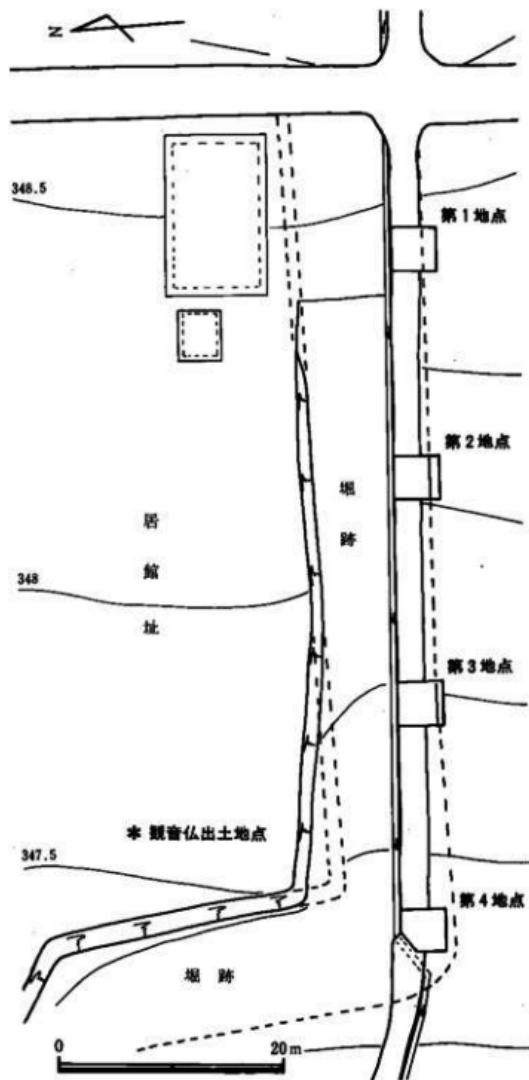
第3地点

北側は道路碎石約10cmの下はすべて礫層で、掘り下げるにしたがい石は大きくなり、表土下約110cmに至ると長さ30cm以上もある大きな石がごろごろとしている。その堆積状態はまさに人為的な投げこみを思わせる大小の石がまじった状態である。南側は約10cmの耕作土があり、さらに埋めたて

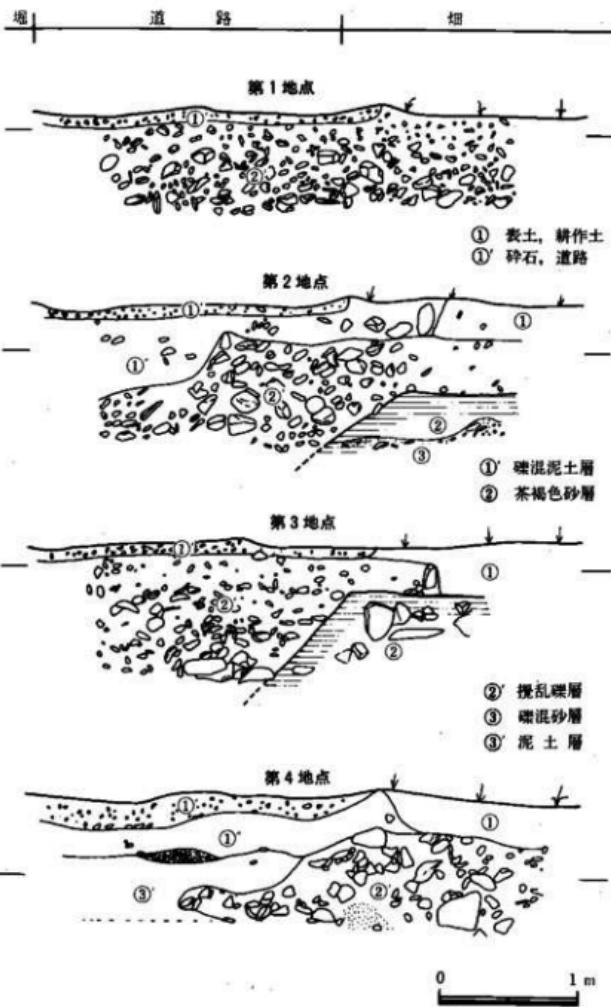
られた礫層が30cmある。したがって縁は表土下約40cmがその上面であり、北側にむかって傾斜している。また一部には大きな石が積み上げられたような状態があるが、この追究をすると大幅に期間延長しなければならないため中止した。

第4地点

道路部分は碎石が15~20cm埋められている。その下約20cmは石をほとんど含まない茶色土層である。さらにその下は部分的に礫層(河原石の自然堆積)をはさんで泥土が深く堆積している。この泥土層には腐植物が多く混じっており、堀であったことがよくわかる。南側畑部分は約30cmの耕作土の下はすべて大小りまじった礫層であり、堀を人為的に埋めたことがわかる。この地点からは堀の縁を検出することができなかったが埋め石の状況から南側1m以内に存在するものと考えられる。



第3図 調査区域詳細図



第4図 各調査地点の堆積土層図(東壁)

5. 遺物 (第5・6図)

発掘面積が狭かったことから、遺物の出土量は少なかった。そして、やはり壠跡であったことからほとんどが小さな破片で、不用品として捨てられたものであった。

土師質土器 (1~21)

1~5は壺である。いずれもロクロ成形で、成形痕が明瞭に残っている。また2~5にみられるように底部は糸切り底である。胎土はいずれも良好であり、色調は褐色を呈している。器形は底部から内湾しつつ外反しながら立ち上がり、口縁部は外側に反っている。文様はまったくない。なお、1、4、5は内黒である。

6~16は甕である。いずれも胎土・焼成は良好で茶褐色を呈す。口縁部は6が内側に傾くほかは外反するのが普通である(7~11)。底部は14がかなり大きく強く外反するほかは15~17にみられるようにきわめて小さく、胴部への立ち上がりもゆるやかである。文様は13が横描波状文であるが、その他はハケ目状痕が、胴下半部に縱位に施されている。4は内面にも不規則に施されている。

18は上部に窓があり、どのような土器か不明である。

19はカマドの中で窓を支える支脚と思われ、きわめて硬くしまっている。

20~21はいわゆる内耳土器で、いずれも口縁部である。独特な胎土焼成であることから他の土器との区分はきわめて容易である。胎土に砂が多く、ややもろい。整形悪く凹凸が激しい。色調は内面灰褐色を呈している。

須恵質土器 (22~32)

いずれも胎土・焼成良好である。22・23は甕の頸部で、24~26は胴部である。いずれも外面は平行条線の叩き目であるが、26はさらに内面に青海波文の叩き目がある。これらはいわゆる須恵器そのものである。

27~31は、胎土・焼成は須恵器そのものであるが、いわゆる叩き目文等がみられず、ロクロが発達した土器である。27・30・31は広口壺の頸部で、ロクロ整形痕がよく残っている。28・29は小形の壺であろうか。

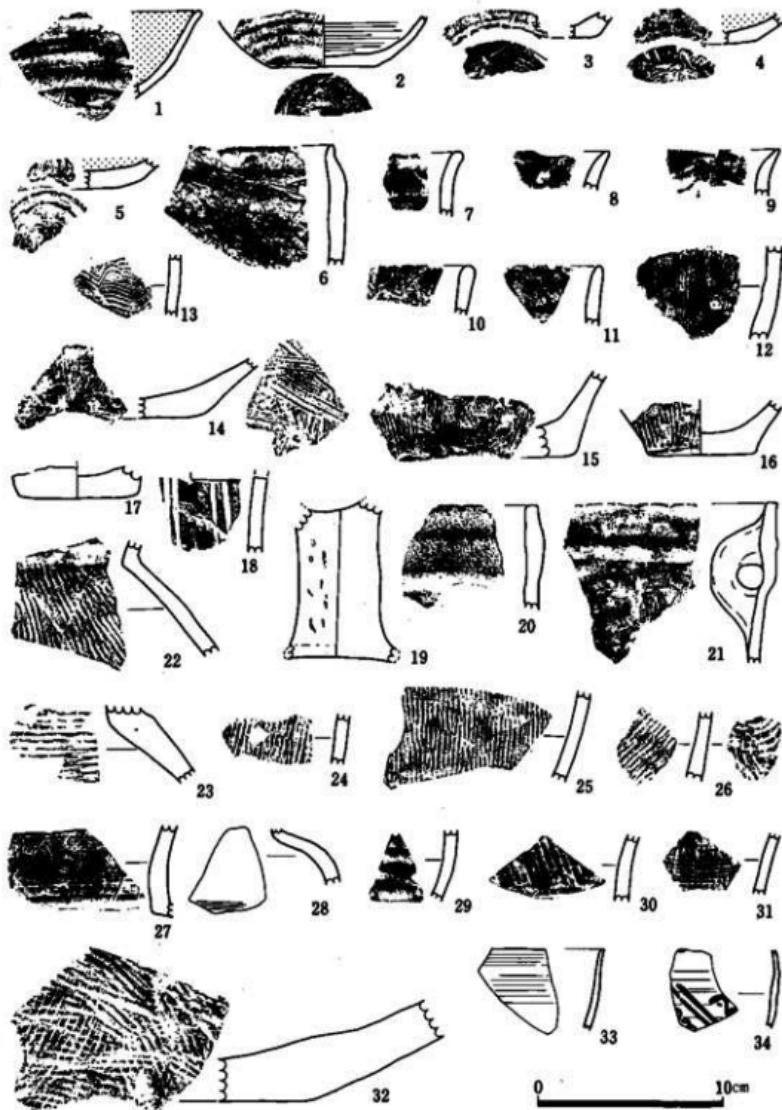
32は須恵器大甕の底部できわめて厚く作られている。外面は平行条線の叩き目である。

陶器 (33~34)

いずれも薄く仕上げられており、外面には釉が塗布されている。33は全体的に整った整形であるが文様はない。34はかなりゆがみをつけて作られている。外面には黒釉で文様が描かれている。

石臼 (第6図)

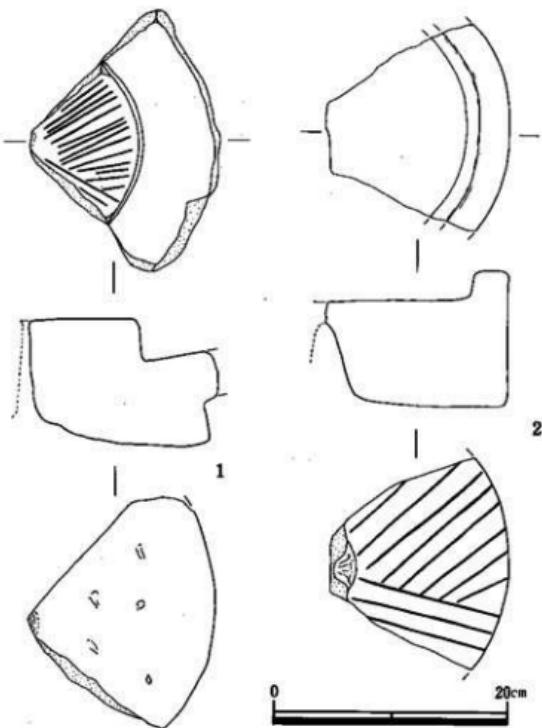
1は下部で4分の1が残っているのみである。磨り部は小さく直径20cm前後と推察される。磨り部の周囲には1段低い受け部がめぐっている。この受け部は外に向って高くなっている。中央の穴は貫通しており、上部の孔を受ける心棒があつたものが落ちないように構造になっている。



第5図 各調査地点出土土器

たものと思われる。溝は磨滅したのかきわめて浅く、深いところではわずかに1mm程度である。

2は上部で5分の1程度の破片である。全体の直径は30cm程度と推察される。表は全体に縁がめぐっている。裏の溝は1に比してきわめて粗く、また溝幅広くやや深い。中央の孔は貫通しておらず、下部の心棒を受ける穴と思われる。



第6図 各調査地点出土の石臼

6.まとめ

今回の調査は以上述べてきたように、道路部分のわずかな範囲の調査であったため十分な成果をあげることはできなかった。しかし所期の目的である堀跡の範囲をある程度把握でき、さらに遺物も予定より多く採取することができた。

以下その成果に若干の考察を加えてまとめに代えたい。

遺構は第1地点においては、砂礫が大量に埋められており、その存在を確認することはできなかった。このことは現地形（道路）が第1地点から第4地点に向って傾斜していることから、当初ほぼ水平であった堀が、地形に合わせて厚く埋められたものと考えられる。第2地点におい

ては約70cm下に堀跡の南縁を確認することができ、この付近における堀幅は11mであることがわかった。さらに後世になって堀を埋めるために大きな石が大量に投げ込まれ、その上に現在の道路が作られたことが確認されたのである。第3地点は第2地点同様地表下約30cmで堀跡南縁を確認し、堀幅はやはり11mであることがわかった。第4地点においては堀跡南縁は確認されず、堀はさらに南に伸びていることがわかった。これはこの部分における堀の北縁を近代になって削ったという地元の人の話からすると、堀が第2・3地点とほぼ同じくらいの幅になると推定されるため、納得のいく状況であった。

遺構については、以上のように居館址南堀が、深さは確認できなかったものの、確實に堀であり、その幅11mであることがわかった。

遺物は土師質土器・須恵質土器・陶器・石臼が出土した。土師質土器は古代の土師器の流れをくむ素焼きの土器であるが、今回の調査では壺・甕・内耳土器が出土した。壺は内黒のものなどもあり、形態的には土師器とほとんど変りがない。甕は破片が小さく器形の推定は難かしいが、胎土・成形が良好で土師器よりも新しいものであることがわかる。内耳土器は独特な胎土・整形であることから一目瞭然に区別できる土器である。これは中世にもっとも特徴的な土器であるが、具体的な年代を引き出すほど研究が進んでいない。

須恵質土器は甕が主である。内面に青海波文の叩き目があるものはかなり古い時代に出現しているが、非常に新しい時期まで残っているものである。大形の甕の叩き目は須恵器の発生から終末まで続く手法である。ロクロ成形の壺等は器肌に光沢をもっており、中世以降の新しい時期のものである。

陶器は非常に少なく、産地の特定も困難であるが、近世以降の新しいものと考えられる。

石臼は、1は小形で特殊な形態をしているが、2はこの地方でも最近まで使っていたものとまったく同形態である。しかし石臼については十分な研究が行われていないため、形態等による年代推定は困難である。

遺物については以上のように、具体的な年代を示す資料はほとんどなく、わずかに内耳土器が中世の特色を示す土器として注目されるだけである。しかしこれも鎌倉時代であるか室町時代であるかということになると不明といわざるをえない。このことは、土師質土器にしても、須恵質土器にしても、もちろん石臼もこの時期の考古学的研究が近年になってようやく緒についたばかりで、編年的研究が進んでいないためである。

平安時代後期、康平年間（1060年前後）に館が造られたという井上氏居館址は、現在リンゴやブドウを中心とした果樹園地帯となっている。居館址は西南隅の一部が欠けた約100m四方の平地として残っており、その周囲に堀跡も残っている。堀跡は南・西辺が明らかに認められ、今回の調査においてもはっきりと堀跡であることが確認された。居館址の東、南は山城に、北は鮎川に囲まれ、西は千曲川によって形成された豊かな水田地帯であり、居館址付近は最近まで豊富な湧水地帯とい

う恵まれた地であった。このようなことからかねてよりこの地が井上氏の居館址であることが定着していた。

しかし、こうした説に対して、当地は付近に御堀、馬場、小坂等の地字があることから定説化されているにすぎず、地形にもその痕跡は残っておらず、現在の小坂神社との関係からしてこの地に居館址があったとは思われない、という説が一部にあった。特に故栗原英治氏は「井上氏居館はもっと東方にありしものならん。しかしてもしこの地にありしとせば、数回目に移り来れるか、あるいは一族中のあるものが分家等してここに住せしものならん。」と言っていたようである。かかる説は小坂神社との位置関係や土栗部落にある井上氏墳墓と称する地との位置関係から推定されたものにすぎず、別の地に居館址を見出したというものではなかった。

ひるがえって当地についてみると、御堀、馬場等の地名はやはりその土地の歴史を語る重要な意味をもつものであり、これを無視することはできないのである。また時代は下るが、元禄13年の絵図をはじめ井上付近の古絵図には必ずしも記載されているのである。そして前述したように現在でも居館址の痕跡は明瞭に残されているのであり、今回の調査でも幅が11mときわめて大規模な堀が館の周囲にめぐらしていたことが確認され、居館址であることに間違はないものとなった。さらに古代・中世の奥信濃でかかる大規模な館を分家と考えることには無理があり、やはり井上氏の本拠地とみることが穏当であろう。またかつて居館址内から出土した高さ約7cmの金銅製観音仏は平安時代中期の様式をもつものであるという。まことにこの地が井上氏の本拠地にふさわしい觀音仏であるといえよう。

参考資料

1. 岩崎長思「井上氏史蹟」『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯』長野県教育委員会、大正15年
2. 大島善治「井上城址」『上高井郡山城居館址類集』上高井教育会 昭和13年
3. 「井上村誌」井上村誌編纂委員会 昭和36年
4. 金井喜久一郎「中世社会」『上高井誌歴史編』上高井教育会 昭和37年
5. 金井喜久一郎「井上氏城跡」『長野県指定文化財調査報告第3集』長野県教育委員会 昭和45年
6. 「元禄13年井上村絵図」 横山哲雄氏蔵
7. 「文久2年、井上村小字絵図」 横山哲雄氏蔵
8. 「金銅製観音仏」 一色喜義氏蔵

写真一
遺跡

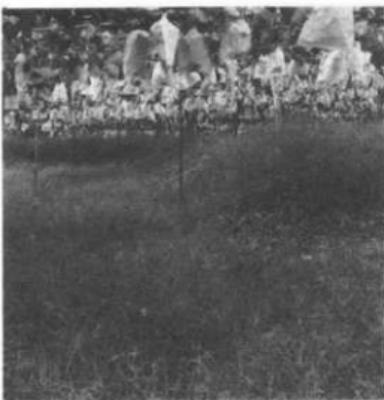


1. 遺跡遠景



2. 調査前の状態

写真二 遺構と遺物出土状態



1. 原形を残す西側掘跡



2. 同 南側掘跡



3. 支脚出土状態



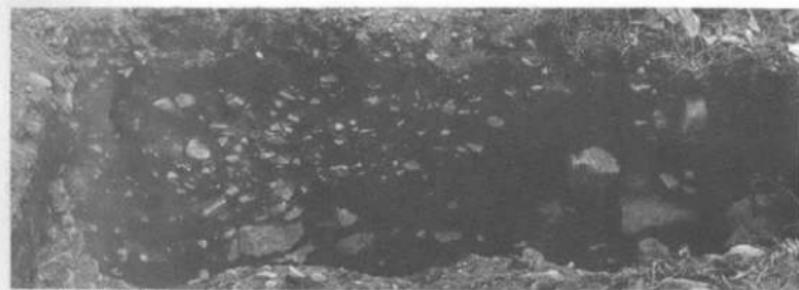
4. 石臼出土状態



1. 第1地点（東盤）



2. 第2地点（同）



3. 第3地点（同）



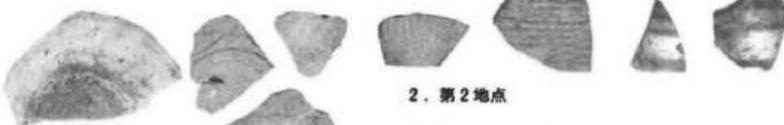
4. 第4地点（同）

写真四

出土遺物



1. 第1地点

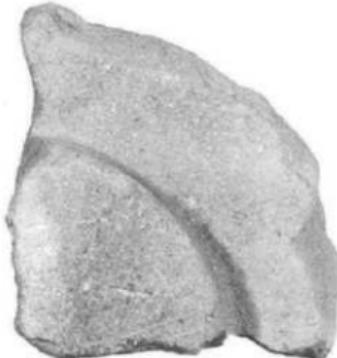


2. 第2地点



3. 第3地点

4. 第4地点

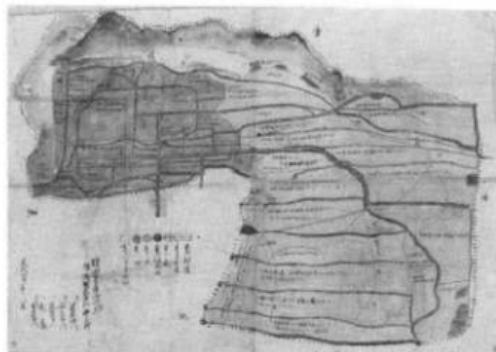


5. 石臼

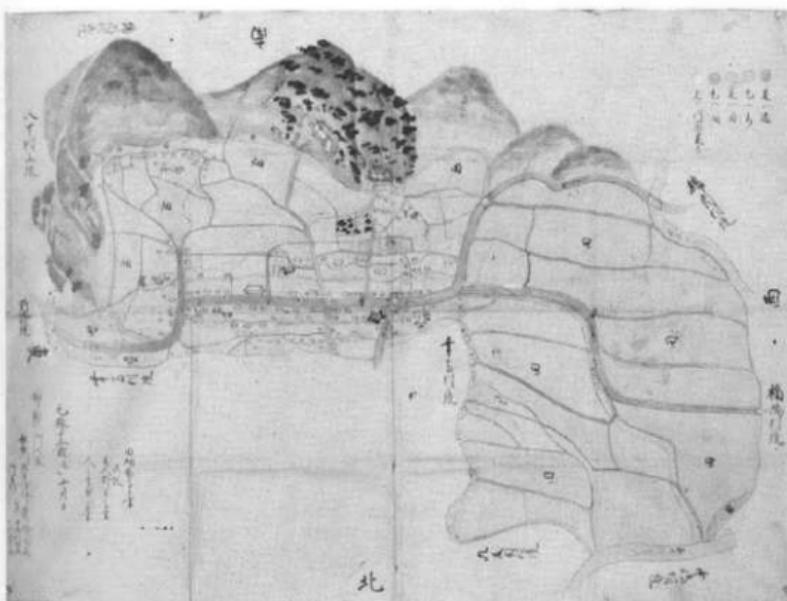
写真五
観音仏と古絵図



1. 居館址出土の観音仏
(实物大—色喜義氏蔵)



2. 井上村小字絵図（文久2年—横山哲雄氏蔵）



3. 居館址の場所を示す井上村絵図（元禄13年—横山哲雄氏蔵）

須坂市埋蔵文化財発掘調査報告第6集

井上氏城跡

—居館址南堀範囲確認調査—

昭和55年3月31日発行

発行 須坂市教育委員会

長野県須坂市大字須坂1528-1

印刷 秀文堂印刷株式会社

長野県須坂市常盤町760



卷之三